

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第4回業務推進全体会合
議事録

日時：平成25年3月22日（金）9：00～12：00

場所：東京大学工学部12号館2階会議室

出席者：18名（順不同・敬称略）

木村_浩（東大）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、木村_謙（東大）、久保（PONPO）、座間（新日本PA）、白木（MNEC）、竹中（東大）、土田（関西大）、丸山（NV研）、三谷（原子力コミュニケーションズ）、諸葛（東大）、吉山（東大）、渡辺（新日本PA）

配布資料

- 4-0. 議事次第
- 4-1. 第3回業務推進全体会合議事録（案）
- 4-2. 報告書目次
- 4-3. 業務結果説明書
- 4-4. コミュニケーション・フィールドの関連研究整理
- 4-5. コミュニケーション・マニュアル
- 4-6. フォーラム計画書
- 4-7. 平成25年度の研究計画（パワーポイント資料）
- 4-8. 業務計画書（平成25年度版）

議題

- 1. 議事録確認
- 2. 平成24年度業務報告
- 3. 平成25年度の計画等
- 4. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

1. 議事録確認（配布資料 4-1）

木村_浩氏より、資料 4-1 に基づき、前回の議事録の説明がなされた。

2. 平成 24 年度業務報告（配布資料 4-2～4-6）

木村_浩氏より、資料 4-3 に基づき、今年度の業務結果の概要が説明された。また、資料 4-2 は今年度の報告書の目次である。

報告書「3. 1 社会調査の実施」の内容については、第 3 回業務推進全体会で共有されたため、本日は省略された。「3. 2 フォーラムの設計」に関して、執筆担当者より内容の説明があり、その後議論が展開された。

大石氏より、資料 4-6 に基づき、「フォーラム計画書」の内容が説明された（報告書「3. 2. 2 フォーラムの設計」の内容にほぼ対応する）。フォーラム計画書にはフォーラムの目的や実施方法、フォーラム検討会議が検討してきた過程などが記されている。

- ・ 「世の中に『原子カムラ』と呼ばれるものが存在し、この存在が正当な原子力に対するコミュニケーションを阻害している」とあるが、「存在する」と断定するのは早急ではないか。「存在すると認識されることがあり、この認識が正当な原子力に対するコミュニケーションを阻害している」のほうが適切ではないか。
- ・ 報告書には、社会調査の結果見えてきた「原子カムラ」像も盛り込むべきではないか。
→Q17「原子力に携わっている人たちや組織に対する印象」における、首都圏住民と原子力学会員の認識のギャップなどを盛り込むべき。（原子力学会員が自ら「ムラ」の壁を作っているように見える）

竹中氏より、資料 4-4 に基づき、報告書「3. 2. 1 コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」の内容が説明された。その後、フォーラムの具体的な内容に関する議論も交え、話し合いが行われた。

- ・ 今回の「フォーラム」は、図 1-2「コミュニケーション・フィールドの目的別による分類」のどこに該当する手法か。
→コンセンサスはいらないが、参加は必要という手法なので、従来の分類には該当しない手法である。

- 今回のフォーラムにおいては、考え方の変化を捉えることが重要であるが、頭の中で思っているだけで発話されない場合（特に、「その考え方は変だ」などの意見は言いづらいと予想される）、どのように変化を認識するか。様々な手法で変化を捉えていく姿勢が重要ではないか。例えば、**参与観察手法**はどうか。

→発言は録音し、記録を作成予定。各回終了後、自由記述主体のアンケートを実施予定。また、全5回終了後、個別にインタビューを行なう予定。
- 第1回は『原子カムラ』とはなんだろうか?』とあるが、何も知識がない状態では、意見は出づらく、質問ばかりになってしまう可能性がある。こういう文脈で「原子カムラ」という言葉が使われている、などの例を最初に提示するなど、口火の切り方に工夫が必要ではないか。

→「原子カムラ」のことを知らない市民も存在する（原子カムラとは認識の問題である、との指摘（前述）とも関連する）。先入観を持たずに議論してほしいとの狙いがある。

→一方で、（それだけで別プロジェクトになるだろうが）「原子カムラ」がマスメディアや専門家の中でどのような経緯で使われるようになったのか、どのような意味で使われているのかを調べ、それとの対比を行なうことも重要だ。
- 討論型世論調査で集まった200~300名の参加者の意見のバランスは偏っていなかったのか。（政策を変えていくような場に参加を希望するのは反対派が多いというデータがある。）

→意見のバランスが取れるよう注意しているはず。検証委員会の報告を調べればわかる。→**要検証**
- コミュニケーションは**Two-Way**であると古くから指摘されているにも関わらず、今までの市民参加の活動は、専門家は枠組みには参加しているが、「コミュニケーション」には参加していない（専門家が自分の考えを変えようとしていない）状況ではなかったか。

→専門家は、市民とコミュニケーションをしても科学的知見に対する意見を変えることはないだろう。

専門家に求められる「変化」は、市民とコミュニケーションをすることにより、**物事は科学的知見だけで決まるわけではない、自分たちが説明していることは一般の人たちが本当に知りたいことではない**（例：専門家は10万年先の危険性を語るが、一般の人たちは現在や10年後の危険性が気になる）、などに気づくことではないか。
- 市民も専門家もどちらも客観的に見ることができ問題をフォーラムの話題にして、その中で市民と専門家の考え方の違いを比べてみるという方法もあるだろう。
- 「コミュニケーション・マニュアル」は完成次第ウェブ公開する予定。

3. 平成 25 年度の計画等（配布資料 4-7、4-8）

木村_浩氏より、資料 4-7、4-8 に基づき、次年度の業務計画について説明がなされた。

- ・ （科学的知見だけではものごとは決まらないとの意見を受けて）結局は、話をする人の表情、説明の意欲、信念などが伝わる等の要因も重要ではないか。
→その要素は大きいですが、それだけが大切と断じるのは危険。
- ・ フォーラムの対話の中で、市民と専門家の「科学」に対する考え方の違いも見えてくるかもしれない。
- ・ 『『原子カムラ』の境界を越えられたかという観点から』とあるが、何をもって越えたとみなすのかを明確にし、議論を進めるべきだ。
→「原子カムラ」そのものの考察も必要。様々な尺度で測る必要があるだろう。

4. その他

今年度の報告書は、4月19日にドラフト提出、5月30日に最終版を提出することになっている。

次年度の業務の詳細については、契約が整い次第、木村_浩氏より連絡される旨が説明された。

以上